

物語大正文壇史 巖谷大四

物語大正文壇史

巖谷大四

文藝春秋

著者略歴

大正四年東京に生れる。昭和十五年早稲田大学英文学科卒業。日本文学報国会書記、鎌倉文庫出版部長、河出書房「文藝」編集長を歴任。現在、日本文藝家協会、日本著作権保護同盟理事、日本近代文学館評議員。著書に、「文壇紳士録」(文藝春秋)、「波の定音」(巖谷小波伝)、「新潮社」本のある風景」(PHP)等がある。

物語大正文壇史 奥付

昭和五十一年十一月十日第一刷

著者 巖谷大四

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地

郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷 精興社

製本 矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替いたします

物語大正文壇史
目次

第一部 明治残影

明治天皇崩御・乃木大将殉死と作家の反応 同人誌『奇蹟』命名由来 岩野泡鳴「文芸書発売禁止に関する建白書」 山本伺山の自殺とその「日記」 青鞥社「五色の酒」事件 吉川英治の徒弟奉公 菊池寛「一高退校」の真相 茂吉、白秋、朔太郎を感動させた室生犀星 岡本一平、かの子夫妻の危機 原阿佐緒と三ヶ島霞子 漱石、初対面の小栗風葉を叱る 岩波茂雄、古本屋開業 島崎藤村渡欧逃避行 「文芸協会」発足と「芸術座」旗揚げ 中里介山「大菩薩峠」連載開始 谷崎潤一郎、下宿代滞納 大正博覧会と「本郷菊富士ホテル」 十六歳の川端康成、天涯の孤児となる 齋藤茂吉の結婚余話 長塚節の死 久保田万太郎、文学に行きづまる 川口松太郎の丁稚時代 第四次『新思潮』発刊 網野菊の女子大裏口入学 中條百合子の華々しき登場 夏目漱石の死

第二部 文芸開華

漱石死後一カ月『新小説』派と『新思潮』の角逐 ロシア革命と江口渙 「羅生門」出版記念会 横光利一、早大予科除籍 井伏鱒二、橋本關雪画伯へ弟子入りの為のスケッチ旅行 萩原朔太郎、処女詩集「月に吠える」上梓 二十歳の大佛次郎の処女作「一高ロマンス」 龍之介、文子の結婚前後 坪田讓治とふるさとの母 童話雑誌『赤い鳥』創刊 白秋、三重吉、宮川曼魚 武者小路實篤「新しき村」建設 抱月の死と須磨子の自殺 菊池寛『中央公論』に登場 『我等』『改造』『解放』と大正デモクラシー 鬼才

村山槐多の死 古本屋、支那ソバ屋、編集者、ボマード会社員等流転
の江戸川亂歩 女流俳人杉田久女と長谷川かな女 一世を風靡し
た島田清次郎「地上」の登場 寺田寅彦の吐血と「病中記」 吉
屋信子「地の果まで」懸賞当選 尾崎一雄の学生時代 若き日の
佐多稻子 菊池寛を負かした野口雨情の将棋 三高時代の梶井基
次郎と中谷孝雄 「花袋秋聲生誕五十年祝賀会」と葛西善藏

第三部 大正挽歌

大阪中之島公会堂文芸講演会 芥川、宇野の京都の奇妙な一夜
宮澤賢治の上京 『種時く人』創刊と小牧近江 日本を追放され
たエロシエンコ 柳原白蓮の「公開離縁状」事件 森鷗外の死と
その前後 片上天弦の弟竹内仁の「兇行自殺」事件 大手拓次の
プラトニック・ラブ 有島武郎、波多野秋子の情死行と遺書 山
之口巖の上京 『文藝春秋』創刊 関東大震災と作家達 築地小
劇場開幕前後と土方興志、小山内薫 演劇青年舟橋聖一と村山知
義 アメリカ帰りの市川房枝 武者小路實篤を「つかまえた」眞
杉柰枝 川端康成の東大国文卒業秘話 『文芸戦線』と『文芸時
代』 「クロスワード・パズル」と片岡鐵兵 伝説的人物、小林
秀雄 学生時代の武田麟太郎と高見順 芥川龍之介の服毒自殺前
後

あとがき

参考文献

索引

菱釘 巖谷純介
題字 原 理

物語大正文壇史

第一部 明治殘影

明治四十五年七月二十九日午後十時頃侍医頭岡玄卿博士は、明治天皇の心臓が途絶えたのを知った。しかしなお体温が残っていたので、その体温が完全に消失した時を、崩御の時間と定めることにした。それは七月三十日午前零時四十三分であった。それから十七分後、午前一時に、皇太子嘉仁親王が新天皇となる踐祚の儀式が宮中賢所で行われ、「大正」と改元された。

大正元年九月十三日は、明治天皇御大葬の日であった。午後七時二十五分、夜の大気をふるわせて砲声がとどろいた。それは明治天皇の遺体をのせた輜車じしやの宮城出発の合図であった。そしてその時刻に、乃木大将夫妻が自刃殉死をとげたのである。

この二つの出来事は、「明治」に生き、育ち、「明治」に親しみ慣れた多くの国民に強烈な衝撃を与えた。

その頃、徳富蘆花は、府下千歳村粕谷（現在の蘆花公園）に住んでいた。蘆花は、明治天皇崩御の知らせを受けて、翌日の「日記」に次のように書いた。

「陛下の崩御は明治史の巻を閉ぢた。明治が大正になつて、余は吾生涯が中断されたかの様に感じた。明治天皇が余の半生を持つて往つておしまひになつたかの様に感じた。」

また蘆花は、御大葬の日には、母屋の六畳を掃き浄めて、白布で覆つた卓を東向きに直し、秋草を活けた花瓶を左右に、正面には小さな鏡を立て、その前には青磁の香炉と香包を置き、家族一同と息を呑んで正座した。それから蘆花が先ず進み出て、一拝して香を焚き、再拝して下つた。続いて妻の愛子と養女の鶴子、最後に女中たちが順々に香を焚いて東方を拝した。

十五日に配達された新聞で、蘆花は、御大葬の日、家族と東方を遙拝している時刻に、乃木將軍夫妻が自刃殉死していたことを知った。

蘆花は、新聞記事を読むと、その新聞で顔を掩い、

「尤だ、無理もない」と呟いた。その後で、書齋から大声で妻愛子を呼んだ。そして興奮しながら、乃木夫妻のことを語った。夫に殉じた静子夫人のことを、とくに言葉をきわめて賞讃した。

愛子はすこし不機嫌になつて、

「わたしだって、それくらいのことではできません」と言つた。

「では我々もやつて見ようか」と蘆花が言い出した。本当に短刀を持って来て、大真面目に、自刃の真似事をやろうとした。まだ七歳の養女鶴子は、そばで見えて、どうなることかと、真青になつてふるえていた。

しかしそれは結局未遂に終つた。

その年四十五歳の夏目漱石は、明治天皇崩御の知らせを受けて、大きな衝撃を受けた。「明治

の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな」気がした。「最も強く明治の影響を受けた」自分が、「其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが」した。

漱石がその胸中を打ちあけると、妻鏡子は突然、「では殉死でもしたらいいでしょう」と、笑談のように言った。漱石は、「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだ」と、これも笑談めかして答えた。

八月中旬から、漱石は中村是公と、塩原、日光、軽井沢、上林、赤倉などを半月余旅して廻り、御大葬の日には早稲田南町の家にいた。書齋に坐つて、合図の号砲を聞いた。それは「明治が永久に去つた報知の如く」聞えた。

そこへ、間もなく乃木大将夫妻殉死の知らせが入った。相続く大きな衝撃であつた。漱石は号外を手にして、思わず妻の鏡子に、「殉死だ、殉死だ」と叫んだ。後に書いた「こゝろ」(大3)の「先生の遺書」の構想はこの時胸にきざまれた。

*

森鷗外はその年五十一歳で、陸軍軍医総監、陸軍省軍医局長であつた。鷗外は、乃木將軍殉死の五日後の「日記」に次のように書いた。

「乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津彌五右衛門を草して中央公論に寄す。」

この「興津彌五右衛門の遺書」という作品は、乃木大将の殉死に触発されて数日で書き上げたもので、乃木將軍に似た理由で殉死をとげた細川藩の藩士の物語で、鷗外の最初の歴史小説であ

り、それ以後鬪外は歴史小説以外のものは殆ど書かなくなった。

その年四十二歳の厄年を迎えた田山花袋は、七月三十日、いつもの通り、勤め先の博文館へ出かけた。そしてそこに深い愁いに満ちた人たちの顔を見た。軒々には弔旗が掲げられていた。西南戦争で父を失い、日露戦争に写真班として従軍したことのある花袋は、国の飛躍的な発展のあたりに見て来ただけに、四十五年の聖代のいろいろなシーンを走馬燈のように頭に浮べた。

青山で行われた御大葬の日、花袋は近くに住んでいたが、一歩も外へ出なかった。雨の降る夜、弔砲の響く頃、花袋は妻と二人で長火鉢に相對して坐っていた。そこへ号外の鈴が鳴り響いた。乃木將軍夫妻殉死の報であった。花袋は愕然とした。「戦歿勇士の魂の蘇^{よみが}りをそれに感じて」悲壮な思いに血を湧かした。天皇の崩御も、乃木將軍の殉死も「功業を樹^たつることの悲劇」だと思つた。

芥川龍之介はその年の七月、第一高等学校の二年を修了して三年に進んだ。二十歳であった。二年の時は寮生活をしていたが、三年から新宿二丁目の自宅に戻った。そこで明治天皇の崩御を知った。そして八月二日付で友人の藤岡藏六に当てた手紙の中に次のように書いた。

「……御不例中に夜二重橋へ遙拝に行つた姉が、小学生が三人顔を土につけて二十分も三十分もおじぎをしてゐたと涙ぐんで話したときには僕も動かされたが其内に御命に代り奉ると云つて二重橋の傍で劇薬をのんだ学生が出たら急にいやな氣になつてしまつた。……」

九月十四日の朝、芥川は新聞を開いて、そこに乃木將軍夫妻が殉死直前に撮つたという二人列んだ礼装の写真を見ると、一瞬いやな氣がした。何故二人の最後の写真を撮つたのかその氣持が

わからなかった。どこかの店頭に飾られることを意識したのではないかと思った。乃木大将は至誠の人だとは思ったが、その至誠は、自分をふくめて、より若い世代の人たちには通じないものではないかと思った。

*

同じ年、二十九歳の志賀直哉は、祖母、異母妹英子、淑子、稻生と一緒に、七月二十一日に箱根へ行った。そしてみんなを外へ遊びに行かせて、自分だけ宿の一室にこもり、当時新人発掘の名手と言われた瀧田樗蔭の編集する『中央公論』から頼まれた小説を書いていた。

それは七月二十九日に出来上った。「大津順吉」一〇五枚であった。志賀は翌三十日に家族を残して、稻生と二人で先に帰った。すこしでも早く原稿を出版社に渡したいと思ったからである。(この作品で、中央公論社から、初めての原稿料一〇〇円をもらった。)その日に天皇の崩御を知った。その三十日の「日記」に、志賀は次のように書いた。

「七月三十日 火

朝急に帰る事にして、出発、

前日(事實は当日午前十二時四十三分)天子様が亡くなられたといふ事を其朝聞く。いゝ人らしかったがお気の毒であつた。(以下略)」

また、九月十四日、つまり乃木將軍殉死の翌日の「日記」には次のように書いた。

「九月十四日 土

雨村訪問、伊吾も来る。玉を突く、

乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時、『馬鹿な奴だ』といふ気が、丁度下女なにかが無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた。」

またその頃、トルストイに心酔していた二十七歳の武者小路實篤は、「かれの死には人類的なものがない。」と乃木殉死を批判し、「それにくらべればゴッホの死の方がはるかに人類的な意味をもつてゐる」と言った。

ところで志賀直哉が七月末に東京三河台の家に帰って間もなく、廣津和郎が舟木重雄に連れられて訪れた。舟木と志賀とは旧知で、廣津は以前に舟木の家で志賀に会ったことがあり、これが二度目であった。

志賀は「自家の裏に生なったのだけれど、よかったら」と言つて、枇杷を盛った盆を出した。文學の話がはずんで、夜の明けるまで話しこんだ。話の中で、

「君たちの同人雑誌の名前はききました？」と志賀が尋ねた。

「少しおかしいような気もするんだけど『奇蹟』という名にしたんだがね」と舟木が答えた。「名はつけてしまえばおちつくものだよ。『白樺』も初めはどうかという気がしたが、雑誌が出たらおちついて来たから」と志賀が言った。

『奇蹟』という名は妙なことからききました。その年の晩春、早稲田大学の仲間である舟木重雄（舟木は三度落第して年は一番上であった。）、廣津、相馬泰三、葛西善藏、光用穆が、井之頭公園に散

策に出かけた。丁度公園の池の近くを歩いていた時、葛西が、

「僕が『富士の裾野』を踊ろう」と言い出した。葛西は生来無口で、控え目で、みんなが文学論に花を咲かせている時でも、ひとり神妙に黙り込んでるような男であった。その葛西が突然公園の真只中で「富士の裾野」を踊ろうと言って踊り出したので皆はびっくりした。葛西はセルの着物にセルの袴をはいていたが、それが奇妙な手振り腰振りで踊るのは何とも剽軽な味があった。

「お、葛西善藏が踊った、奇蹟！ 奇蹟！」と、舟木が笑いながら叫んだ。そして、自分で言った「奇蹟」という言葉に急に気がついたように、

「そうだ。雑誌の名は『奇蹟』にしようじゃないか」と言った。

こうして『奇蹟』という同人雑誌は、その秋九月から創刊されたのである。

創刊号には、葛西善藏の処女作「哀しき父」、廣津和郎「夜」、舟木重雄「馬車」、峯岸幸作「日没」等が載った。

『奇蹟』は翌年五月号まで七冊出して終った。途中で植竹書院という出版社が引き受けたが、売れ行きが悪いので、採算が合わないと言って投げ出した。発行部数と照らし合せて、寄贈した分を引いて見ると、月に二十部位しか売れていなかった。

*

当時、内閣総理大臣は西園寺公望、内務大臣は原敬であった。

その頃大阪の池田で、「青鞥社」の遠藤清子と同棲しながら「大阪新報」の記者をしていた四